

博士学位論文概要

ガンダーラの仏教彫刻と生天思想

田辺 理

本論文は、ガンダーラの仏教彫刻の図像を取り上げて、それらがインド古来の来世観である生天思想と深く関連していることを解明しようとしたものである。以下、その要旨を記す。

序 論

現在のパキスタン北部に位置するガンダーラは、前 6 世紀末以降アケメネス朝ペルシアによって支配されていたが、前 4 世紀後半にアレクサンダー大王（前 336-323）が、アケメネス朝ペルシアを征服し、ガンダーラを短期間ながら支配した。大王の死後、この地には、セレウコス朝、インドの最初の統一王国であったマウリヤ朝、グレコ・バクトリア朝、インド・グreek朝、インド・スキタイ朝、インド・パルティア朝、クシヤン朝が興亡した（前 4 世紀から後 3 世紀）。特に、クシヤン朝の時期に、ガンダーラでは仏教文化が栄え、各地に仏塔が建立され、多くの彫刻が制作された。

このガンダーラの仏教美術の基本的な特色は、主に帝政ローマ期のグレコ・ローマ美術の図像と写実的技法を用いて、インドで誕生した仏教の内容—仏陀、菩薩、仏伝など—を造形化したものである。

このように、外来の二つの造形要素、すなわちグレコ・ローマ美術の様式と図像、仏教という宗教的内容を折衷して成立したガンダーラの仏教美術を代表する彫刻は、大別すると、二種類に分類できる。その一つは、一見して仏教的内容を造形化したとわかる図像（以下、仏教的な外観の彫刻と表記）で、例えば仏陀像、釈迦菩薩像、弥勒菩薩像、執金剛神像、四天王像などの尊像と、釈迦牟尼の生涯を扱った仏伝浮彫である。もう一つは、一見しただけでは仏教と関係があるか否かわからないような図像（以下、非仏教的な外観の彫刻と表記）である。これはグレコ・ローマ美術の影響を明確に示す異教的作品であって、例えばディオニューソス（バックス）神と眷属の飲酒饗宴図、エロースの像、ギリシア神話のケートスやイクテュオケンタウロス、トリートーンなどの海獣の図像や、アカンサス、葡萄唐草文や木蔦文などの装飾文である。

このようなガンダーラの仏教彫刻の研究は、19 世紀末期より、図像と仏教文献の比較考察によって彫刻の主題の比定をする仏教図像学的な研究を中心に進められた。J・バージェスは A・グリュンヴェーデル著『インドの仏教美術 (*Buddhistische Kunst in Indien*)』（1893 年）の英訳を増補した際に、ラホール中央博物館蔵のディオニューソ

ス神と眷属を描写した浮彫を挙げ、倫理的な宗教的儀礼、即ち仏教とは殆ど関連がないと述べている。A・フーシェは名著『ガンダーラのギリシア式仏教美術 (*L'art greco-bouddhique du Gandhâra*)』(1905-1922)において、非仏教的な外観の彫刻の由来と評価、仏伝浮彫の図像学的比定、仏像のギリシア起源、彫刻の編年、ガンダーラの仏教美術の中央アジア、東南アジア、東アジアへの伝播などを総合的に研究し、ガンダーラの仏教美術研究の基礎を築いた。本著は実にスケールの大きい研究であり、以後の研究はこの大著が扱った諸問題を増補、発展、修正、反論を行う形でなされた。フーシェの大著の第一巻においては、仏伝浮彫を中心とした仏教的な外観の彫刻と非仏教的な外観の彫刻を考察しているが、主に仏教的な外観の彫刻の解釈が重視され、非仏教的な外観の彫刻は、仏教的な意味を欠く一種の建築装飾と見なされている。

さらに、グレコ・ローマ美術とガンダーラ美術との関連について考察したH・ブフタルや、高田修は、フーシェと同様に、非仏教的な外観の彫刻と仏教との関連を認めていない。

このように、ガンダーラの非仏教的な外観の彫刻は、当初、建築装飾として解釈され、全く仏教的な意味が認められていなかった。しかしながら、そのような見解に対し、仏教との関連を認める見解も提示されるようになった。

B・ローランドは、グレコ・ローマ美術とガンダーラの仏教美術との関連を述べる中で、長方形石板に表現された飲酒饗宴図や奏楽舞踏図、権を持つ海の神々の図像を挙げ、それらがディオニューソス神に関係する饗宴の特徴を有すると述べながらも、シッタールタ太子の婚約の場面を表現していると解釈した。一方、K・フィッシャーは、ガンダーラの仏教美術に表現された男女が交歓するエロティックな図像を数点挙げ、それらの図像は、古代インドの仏教美術に表現された男女のペア像、いわゆるミトゥナの模倣であり、大地の豊穡を象徴するのみならず、僧侶(出家者)が性愛にふけることへの警告、愛欲が悟りの妨げになることへの警告を意図したものであると解釈した。

また、M・L・カーターは、ガンダーラの飲酒饗宴図について注目すべき考察を行った。カーターは、当初、ガンダーラの飲酒饗宴図は、インドのヤクシャ、ヤクシニー信仰を造形化したものであると考定していた。しかしながら、その後の論考では、仏教の宇宙論を参照して、ガンダーラのディオニューソス神と眷属の飲酒饗宴図は、在家仏教徒が死後に赴くといわれている「六欲天」の一つの四天王天の中の三種類のヤクシャたちに関係すると考定して、ディオニューソス神と眷属に関係する図像は仏教的な内容を

造形化したものであると解釈した。

さらに、近年、田辺勝美が到彼岸、涅槃、極楽などの来世観を主とする仏教的視点を初めて導入し、かつローマの葬礼美術の知見を活用して研究を進め、非仏教的な外観の彫刻は仏教徒が死後に享受できる快樂の造形表現であるという新説を提示した。

このように、現在のガンダーラの仏教彫刻の研究においては、非仏教的な外観の彫刻を仏教における来世と関連させて解釈する方向性が徐々に受け入れられつつあると思われる。

つぎに、従来の研究の問題点を挙げる。

第一の問題は、非仏教的な外観の彫刻については、長年多くの研究者が主にフーシェ説に追随して、その仏教的な意味を本格的に考察してこなかったことである。唯一、本格的にガンダーラの非仏教的な外観の彫刻を仏教的視点から考察したのが、上述した田辺の論考と著書である。しかしながら、その結論の一部は、著者自身や他の研究者によって既に否定されている。それ故、田辺の見解は、一定のコンセンサスを得るまでには到っていない。

第二の問題として、ガンダーラの非仏教的な外観の彫刻の研究に関して、欧米の研究者は一般的に、漢訳経典の記述を活用していない点を挙げるができる。仏教経典を使用したとしても、パーリ語やサンスクリット語経典の翻訳（英仏独語訳）に頼り、漢訳経典を活用していない。

第三の問題として、ガンダーラの非仏教的な外観の彫刻は、グレコ・ローマ美術の技法や図像を借用して仏教的内容を造形化したものであるにもかかわらず、従来の研究では、グレコ・ローマ美術の図像との綿密で幅広い比較研究を殆ど行わなかったことを指摘しなければならない。

このように、ガンダーラの非仏教的な外観の彫刻の解釈には、様々な問題点がある。それらの問題点を解決するために、筆者は、これまで完全に看過されてきた部派仏教の生天思想を採用することによって、ガンダーラの非仏教的な外観の彫刻を仏教的に解釈することが可能となるのではないかと考えたのである。生天思想とは、インド亜大陸において古来より存在する来世観であり、死後天界に再生し復活することを希求する考え方である。仏教における生天は、輪廻転生の一形態であり、生天後、現世に戻ることができる点において、現世に戻ってこない涅槃や到彼岸、解脱、極楽往生とは根本的に異なるものである。無論、仏教のめざす理想の境地は涅槃であるけれども、涅槃に到るの

は至難の業であるから、釈尊は、在家信徒に涅槃ではなく天界に再生する生天を勧めていた。生天思想は、仏教経典にも数多く言及されており、グレコ・ローマ美術に見られる来世観とも共通する部分がある。それ故、生天思想を採用し、グレコ・ローマ美術の研究成果を援用してガンダーラの非仏教的な外観の彫刻を図像学的な視点から再考すれば、非仏教的な外観の彫刻の解釈に新しい光を当てることができると考えられるのである。

以上より、本論文の研究目的は、ガンダーラの非仏教的な外観の彫刻が仏教の来世観である生天思想と関連していることを解明することにある。

このような研究状況と問題点を踏まえ、筆者は以下4部構成で、生天思想とガンダーラの仏教彫刻との関連性について論述した。

第1部 生天思想について

第1部においては、仏教経典に記述された天界の構造や情景を示し、さらに碑文資料からガンダーラにおいて生天思想が実在していたことを明らかにした。

第1章では、生天思想の根本をなす天界の構造を明示した。天界は、下方から欲界、色界、無色界に分かれている。仏教徒が生天する先の天界は、欲界中の六欲天以上の世界である。さらに、在家が生天することができる世界は、基本的に欲界中の六欲天である。仏教経典には、四天王天、三十三天、夜摩天までの天界の情景しか記述されていないが、その中の三十三天と四天王天までは、人間が得る快樂と同様のものを得ることが可能である。特に、三十三天は、死後赴く先として、在家に最も好まれたことを明らかにした。

第2章では、生天するための方法を考察した。生天する過程は、基本的に、善行→作功德→生天である。すなわち、生天するためには功德を得なければならない。功德を得るための善行には、父母への恭敬や、仏教への帰依など様々な行為がある。しかしながら、善行の中でも、功德が大きく、生天することができる行為の代表的なものが、布施や舎利供養、仏塔創建、仏塔供養である。また、園林などの土地の寄進は、仏教教団を拡大するための最上の布施であった。このような布施や供養の果報によって、生天が得られるのであった。

第3章では、主に舍利容器の銘文から、ガンダーラにおいて生天思想が実在したことを明らかにした。カローシュティー文字で刻印された文字銘には、三十三天などの天界についての言及が見られる。この他に、brahmapuṇya（梵福）や、hitasukha（安寧安楽）という語句を刻印した文字銘が知られている。三十三天や、これらの語句は、いずれも生天に関連しており、ガンダーラにおいて布施や舍利供養によって生天を望んだ仏教徒が存在したことが判明する。

第2部 仏教的な外観の彫刻と生天思想

第2部では、生天思想がその制作背景に関わっていると考えられるガンダーラの仏教的な外観の彫刻を考察した。

第1章では、ガンダーラのアームラパーリーによるマンゴー園の布施を表現した仏伝浮彫を考察した。本章は、第1編と第2編に分かれている。

第1編では、この浮彫の典拠となったと考えられる経典について考察を行った。この浮彫では、アームラパーリーは必ず水瓶をもった姿で表現されている。水瓶に入っている水を釈尊の手にかけることによって園林を寄進する契約が完了することから、アームラパーリーが持つ水瓶は園林の寄進を象徴するものである。この水瓶に着目して、アームラパーリーの物語を記述した仏教経典を分類すると、アームラパーリーが水瓶を持って園林を寄進する内容を記した経典は、『長阿含経』と『四分律』の二経典だけであり、それ以外の経典では、アームラパーリーが食事の際に釈尊と僧たちに手と口を洗うための水を提供していたと記す。『長阿含経』と『四分律』の二つの経典は、法蔵部に属する経典であることから、アームラパーリーによるマンゴー園の布施の図像の制作には法蔵部の経典が関連していることを明らかにした。

第2編では、ガンダーラにおいて何故アームラパーリーの浮彫が制作されたのか考察した。まず、アームラパーリーがマンゴー園を布施した背景には、在家者による僧団への土地の寄進がある。最初期の出家者は、遊行をおこなっていたが、やがて在家から土地や精舎、園林を寄進してもらい、そこを活動拠点として定住した。それ故、土地などの不動産の寄進が在家者の布施の中で、重要な位置を占めるようになった。そして、布施には必ず果報があるが、その果報として仏教経典中に頻繁に記述されているのが、生天である。アームラパーリーが食事の布施を行った時も、釈尊がその果報について説く

場面が見られるが、その果報とは、生天に他ならない。さらに、アームラパーリーはガニカーと呼ばれた高級娼婦である。ガニカーの客人は王侯貴族や大商人であったので、そのような人々から金をまきあげたガニカーもまた富裕であった。それ故、ガニカーであったアームラパーリーは園林を所有し、布施することができたのである。

このように、アームラパーリーが園林を布施した背景には、(1) 高価な不動産を布施することができる富裕な高級娼婦の存在と、(2) 伽藍や精舎を建立すべき土地を必要とした仏教教団、(3) 高額の布施の果報による生天を望む在家仏教徒という少なくとも三つの条件が存在したことが明らかとなり、アームラパーリーによるマンゴー園の寄進図には生天思想が深く関連していることが明らかとなった。

第2章では、ガンダーラのナーガ王の舍利容器供養図を考察した。ナーガ王と眷属が釈尊の舍利容器を直接供養している。まず、この作品の作品解説を行い、出土地、年代を明らかにした後、ナーガ王の舍利供養を記す仏教経典を特定した。さらに、古代インドの仏教美術に見られるナーガ王の舍利供養図、仏塔供養図を仏教経典の内容と比較検討した。その結果、本作例がラーマ・グラーマにおけるナーガ王の舍利（容器）供養を描写したものであるとするのが最も妥当であると結論した。次に、この彫刻の制作背景について考察を行った。第1部第2章で示したように、舍利供養の果報には生天がある。一方で、『ジャータカ』などの経典では、ナーガ王は生天することを望んでいると記述されている。ナーガ王が生天を望むのは、ナーガ王が涅槃をするために人間に生まれ変わらなければならないからだと考えられる。以上のことから、この作例の制作背景には生天思想が存在すると推定した。

第3部 非仏教的な外観の彫刻と生天思想

—ディオニューソス神と眷属の図像を中心に—

第3部では、主にディオニューソス神と眷属に関連する図像を扱った。

第1章では、平山郁夫シルクロード美術館所蔵の世俗的な二つのガンダーラ彫刻の主題の考察を試みた。この2点の浮彫には、「男性の顎に手を触れる女性」と、「鏡をもつ女性」が表現されている。異性の顎に手を触れる仕草は、グレコ・ローマ美術の類例やギリシア語史料に見られる仕草によれば、多義的な愛情表現を意味し、帝政ローマから

ガンダーラに伝播したと考えられる。また、後者の彫刻はインド美術における鏡をもつ女性像と比較考察した結果、性愛を表現することが判明した。それ故、両図像ともに性愛を象徴することができる。そして、仏教経典やサンスクリット文学作品の叙述を例証として、この2点の彫刻はガンダーラの高級娼婦と娼館を描写したものと結論づけ、性愛表現が生天した来世（主に六欲天）の悦楽を暗示していると指摘し、ガンダーラの非仏教的な外観の彫刻の解釈に生天が関わっていることを示唆した。

第2章においては、田辺勝美が提示したガンダーラ仏教彫刻のディオニューソス神と眷属の解釈について再検討を行うために、ザール・デリー仏寺址出土従三十三天降下図を採り上げた。まず、本図に描写された男女の飲酒饗宴、舞楽、交歓図を、グレコ・ローマ美術に見られるディオニューソス神と眷属の図像を省略したものであると考定した。さらに、古代インド仏教美術に見られる男女のペア像であるミトゥナ像とも比較を行い、その影響についても言及した。そして、ザール・デリー仏寺址出土従三十三天降下図のディオニューソス神と眷属の饗宴図は涅槃や到彼岸などに関係するのではなく、死後三十三天の楽園に生天して得られる快樂の特徴を表現したものであると、漢訳及びサンスクリット語経典を用いて結論づけた。この研究によって、ガンダーラの彫刻に見られる男女の交歓や饗宴を描写した図像が制作された背景には、主に在家仏教徒による生天希求が存在したことを初めて指摘することができた。

第4部 非仏教的な外観の彫刻と生天思想 —グレコ・ローマ系海獣の図像を中心に—

第4部では、ガンダーラの仏塔階段の役割と非仏教的な外観の彫刻の意義について考察した。

第1章では、仏塔正面の付設階段の側面の装飾として使用されていた浮彫十数点の図像の主題を分類し、それらが主にディオニューソス神と眷属の図像や、トリートーンなどの非仏教的なものであることを明らかにした。さらに、仏塔のシンボリズムを参照し、仏塔は天と地を結ぶ柱軸であり、本来的に仏教徒に死後の生天を約束する装置であるので、仏塔に付設された階段を荘厳する図像は、観者に生天を想起させるために、仏塔階段の蹴込みの荘厳に意図的に用いられたと結論した。

第2章では、仏塔階段の蹴込みとして用いられていた東京個人蔵の「イルカを双肩に担ぐトリートーン像」について、インド、中央アジア、ギリシア、ヘレニズム、グレコ・ローマ美術の類例を博捜し、その起源と伝播について考察した。帝政ローマの石棺などに表現されたトリートーンは、靈魂の導師として死者を海の向こうの楽園に連れて行く、ないしは来世における至福を象徴するという職能を有することから、ガンダーラの仏塔階段の蹴込みなどに用いられたトリートーン像も同じく、仏教徒を死後、海の向こうにある天界（特に六欲天）へ導く導師、あるいは生天を象徴するものとして用いられていた可能性を明らかにした。

第3章では、仏塔階段の側桁に嵌め込まれた三角形浮彫について考察した。三角形浮彫には、ケートスやイクテュオケンタウロスなどの海獣が表現されることが圧倒的に多い。また、それらの浮彫は、仏塔階段全てに装飾されていたものではなく、一部の階段に限定されることから、何らかの意味を有し、選択されて表現されたものであると考えられる。そこで、同様に帝政ローマ期の石棺に表現された神殿入り口のペディメント上部の三角形空間に表現されたケートスやイクテュオケンタウロスなどの図像の職能を援用し、ガンダーラにおいてもこれらの図像が生天へ導くないしは、来世における至福などの生天に関連するものであることを明らかにした。

最後に、第4部の第1章から第3章までの結論を統合して、仏塔階段を装飾したディオニューソス神と眷属の図像や海獣などの非仏教的な外観の彫刻は、生天思想に関連する図像であると結論した。

結 論

以上、ガンダーラの仏教彫刻の図像と生天思想との関連について考察した。その結果、仏教的な外観の彫刻と非仏教的な外観の彫刻の双方に生天思想の影響が見られることを確認した。仏教的な外観の彫刻の中では、アムラパーリーによるマンゴー園の布施とナーガ王による舍利（容器）供養図の制作背景に生天思想が存在している。このことから、ガンダーラでは生天するための功德を得ることができる布施や舍利供養に関連した物語が好まれたと思われる。

一方、非仏教的な外観の彫刻の中でも、ディオニューソス神と眷属による飲酒饗宴図、舞楽図、交歓図は、仏教彫刻を布施した在家が求めた理想的な来世、六欲天の具体的な情景を表現したものである。それによって仏教徒に、生天した時の楽しさ、生天によって得られる果報を予告したのである。さらに、ギリシアの海獣の図像は、霊魂の導師として仏教徒を死後天界に導く救済者、ないしは天界で得ることができる至福を象徴したものであった。それ故、海獣の図像は、その観者に、生天を想起させ、生天を希求させるという、生天の可能性を確信させる効用があったと思われる。

このようなわけで、この二種類の非仏教的な外観の彫刻は、ガンダーラの在家の、率直かつ根本的な再生への願いが表現された、まことに仏教的な彫刻であったことが判明する。

以上の考察により、ガンダーラにおいて生天思想が実在し、ガンダーラの仏教的な外観の彫刻は無論のこと、非仏教的な外観の彫刻も、生天思想と深い関連があることが明らかになったと思われる。

今後は、この論考を出発点として、本論文で考察できなかった種類の図像と生天思想との関連を考察することによって、何故ガンダーラにおいて多くの仏教彫刻が生み出され、仏教美術が隆盛したか、その理由を解明するために研究を進めていきたい。